

短大家政科学生の情報機器・情報教育に関する意識調査

賢明女短大 ○長瀬 修子 六代 典行

【目的】情報化社会の急激な進展に沿った新指導要領に基づき、数年後には短大入学時に中学校の情報基礎や、高校の家庭情報処理の履修者の割合が増加することは確実で、非情報系大学での情報教育は、これまでの基礎的機器操作教育から、情報活用能力育成・情報倫理教育等が必須課題となる。これに先立ち、今後の情報教育の参考にする目的で、入学以前の情報環境と短大での基礎教育終了後の意識についてアンケート調査を実施し、検討した。

【方法】1994年6月本学家政科学生258名に対し、次の項目で行った。①入学前のパソコンの知名度と知った時期・機会・方法②パソコンのイメージと関心度③保有状況④基礎教育履修後の意識（興味・難易度・意欲）変化⑤将来への活用志向。

【結果】①パソコンという言葉は、小学校時代にすでに68%がテレビ・雑誌・店頭等マスコミを通して知っており、76%は高校入学以前に見たり触れたりしている。実際に使用したのは小学校13%、中学校22%、高校37%で、その機会は授業中、家庭・友人がほぼ同率で36%前後である。イメージとして便利・実用的が39%、時代の先端・難しいが55%、貴重品・高価は4%程度である。保有率は21%で、保有していない者の80%以上が欲しい・事情が許せば欲しいとの結果を得た。履修後の意識変化は興味の増加が74%、難易度では難しい、意欲面ではさらにやってみたいがほぼ同率で79%を示した。学習効果では77%が有効であったと答え、95%が将来役立てたいと考えており、資格取得などの実用志向の高いことが認められた。